様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　８ 月 ２６ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１７６００

研究課題名（和文）認知症カフェにおける市民ボランティアの体験と認知症の理解

研究課題名（英文）Citizen volunteer experience and understanding of dementia at a dementia cafe

研究代表者
菅沼　真由美（SUGANUMA, MAYUMI）

山梨大学・大学院総合研究部・医学研究員

研究者番号：５０５９７０２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：ボランティア1人1人が認知症の人の実像を理解し、当事者意識を持つことは、認知症に対する偏見をなくし、適切な対応につながると考えられる。認知症サポーター養成講座などの座学とともに、認知症の人と直接接することは、認知症の人の正しい理解を深める機会になりうると考える。
認知症の人への対応方法をボランティア同士で共有し、行動心理症状や危険を伴う行動への対応方法を学べる教育方法の検討の必要性が示唆された。また、認知症になってもその人らしく住み慣れた地域で暮らし続けることを可能にする地域づくりのために、ボランティアがカフェでの認知症や対応方法の体験を地域の人に伝えることが期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ボランティアにとってカフェは、専門職とともに参加し、日常的な場で認知症の人や家族と直接関わることで、認知症の理解や認知症の人への接し方を学ぶことができる有用な場である。さらに、認知症に対する偏見をなくし認知症になっても暮らしやすい地域をつくるきっかけとなる場でもある。限られた時間のなかで、認知症の人や家族と関わる時間は少なく、ボランティアが認知症の人や家族との接し方を学ぶことは容易でないため、継続教育の必要性が指摘されている。認知症カフェの限られた時間のなかで、ボランティアが認知症の人と家族を正しく理解し、適切な接し方を習得できるための方策を検討することが課題である。

研究成果の概要（英文）：It is thought that having each volunteer understand the real image of a person with dementia and have a sense of ownership will eliminate prejudice against dementia and lead to an appropriate response. We believe that direct contact with people with dementia, along with lectures such as dementia supporter training courses, can be an opportunity to deepen the correct understanding of people with dementia.
It was suggested that it is necessary to study an educational method that allows volunteers to share how to deal with people with dementia and learn how to deal with behavioral psychological symptoms and dangerous behavior. In addition, it is expected that volunteers will share their experiences with dementia and how to deal with it at the cafe in order to create a community that enables them to continue living in the area where they are accustomed to living even if they have dementia.

研究分野：地域看護学

キーワード：認知症　認知症カフェ　市民ボランティア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

認知症患者の増加に伴い、令和元（2019）年の「認知症施策推進大綱（厚生労働省）」では、認知症になっても住み慣れた地域で自分らしく暮らし続ける「共生」を目指している。認知症の人と家族が集う場として「認知症カフェ（以下カフェ）」の設置が推進され、年々増加している。

カフェは、認知症の人やその家族が地域の人と専門家と相互に情報を共有しお互いを理解しあう場であり、参加者が社会との交流をもち、負担が軽減するなどの効果が期待されている（武地，2015）。設置主体は、介護サービス施設・事業所、地域包括支援センターであり、支援スタッフは専門職ボランティアが中心となっている。今後、市民ボランティア（以下ボランティア）が中心となっていくことが求められている。

ボランティアにとってカフェは、専門職とともに参加し、日常的な場で認知症の人や家族と直接関わることで、認知症の理解や認知症の人への接し方を学ぶことができる有用な場である。さらに、認知症に対する偏見をなくし認知症になっても暮らしやすい地域をつくるきっかけとなる場（武地,2015）でもある。しかし、カフェの開催状況は、全体の 76.8%が月に１回、平均 2 時間 20 分の実施である（認知症介護研究・研修センター,2018）。限られた時間のなかで、認知症の人や家族と関わる時間は少なく、ボランティアが認知症の人や家族との接し方を学ぶことは容易でないため、継続教育の必要性が指摘されている（武地,2015：原ら,2017）。認知症カフェの限られた時間のなかで、ボランティアが認知症の人と家族を正しく理解し、適切な接し方を習得できるための方策を検討することが課題である。

２．研究の目的

カフェに参加しているボランティアが認知症を正しく理解し、適切なかかわりができるための支援方法を検討するために、ボランティアのカフェ参加前後の認知症に対する認識、認知症の人への対応への認識を明らかにした。

３．研究の方法

記述的質的研究デザインとし、異なる状況での体験や理解状況を把握するために Ｙ 県内の２ケ所のカフェに参加するボランティア１０名に半構造化面接を行った。カフェの形態・内容の均一化を図るために、(1)専門職が主催し認知症の人と家族、ボランティアが参加している、(2) 相談やレクリエーション、自由な交流がある場とした。ボランティアは、(1)医療・福祉・介護職として勤務した経験がない方(2)カフェにボランティアとして 10 回以上参加している方(3) 直接認知症の人とその家族と交流している方とした。面接は、「カフェ参加前の認知症の人との交流体験」「カフェ参加前の認知症の理解と認知症の人と家族への接し方」「カフェでの体験と認知症の理解と認知症の人と家族の接し方」のインタビューガイドにそって行った。研究参加者の許可を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。

分析は、逐語録を精読後、カフェ参加前と参加後の認知症と認知症の人の理解、認知症の人と家族への接し方に関する記述を、意味のあるまとまりで抜き出し、コード化した。2) コード化したデータから意味の類似性と相違性を比較し、類似した意味内容をもつものを集めてまとまりをつくり、集まりがもつ意味の特性を表すにふさわしい名前をつけた（サブカテゴリーの抽出

3)項目ごとにサブカテゴリー間での類似性と相違性について比較分類することで抽象度をあげ、サブカテゴリーの集まりやその内容や性質を表す言葉で命名した（カテゴリー化）。データ分析では、認知症看護の臨床経験と質的研究の経験をもつ研究者で合意が得られるまで検討を行い、妥当性の確保に努めた。

研究は、山梨大学医学部倫理委員会の審査を受け、2 ヶ所のカフェの責任者から研究実施の承諾を得た。カフェの責任者から紹介された研究参加者には、個別に研究者から研究目的・匿名性・秘密厳守の保障、研究への参加の自由・辞退の権利の保障について書面を用いて口頭で説明し、協力が得られる場合は同意書に署名を得た。得られたデータは個人が特定できないよう形で匿名化し、鍵のかかる場所で厳重に管理した。

４．研究成果

（１）認知症についての理解

カフェ参加前には、認知症についてわからない人もいたが、病気として認識し、中枢症状、失行、暴言、物盗られ妄想、徘徊、易怒性などの行動心理症状など、多様な症状があると捉えていた。カフェへの参加を通して、人によって症状が異なり、全員が怒る、叩くなどの症状はないこと、症状が徐々に進行することを理解していた。さらに、誰もがなりうる病気であり、自分が認知症になった場合も想定して考えていた。カフェへの参加を通して、人によって症状が異なり、全員が怒る、叩くなどの症状はないこと、症状が徐々に進行することを理解していた。さらに、誰もがなりうる病気であり、自分が認知症になった場合も想定して考えていた。

（２）認知症を患う本人の気持ち・思いの理解

カフェ参加前は、認知症になってもその人の本質は変わらないと捉えている人と、認知症の人は、病識がない、普通ではない、生活ができなくなると捉えていた。カフェ参加を通して、認知症になっても、自らの感情を持ち、行動にはその人なりの理由があり、自尊心や自律心など自分の意思を持ち、認知症の病気にかかわらず普通に生活していること、できなくなることへの葛藤を持っていること、偏見の目で見られることを捉えていた。認知症の人と直接かかわることによって、認知症になっても意思をもち生活する一人の人であること、個々の人の抱えている思いを認識できる機会になっていた。

2018 年の厚生労働省「認知症の人の日常生活・社会生活における意思決定支援のガイドライン」では、認知症の人の特性を踏まえた意思決定支援の基本原則として、本人の意思の尊重を挙げている。認知症になっても本人が意思をもつ一人の人であることを知ることは、認知症の人の特性を踏まえた意思決定支援につながりうると考える。

（３）認知症の人への対応への認識

カフェ参加前は、認知症の人との対応について、認知症の人の言動を否定してはいけないと考えつつも、適切ではない言動を否定し、適切に行動できるように説得していた。さらに、認知症の人にどう接していいのかわからなかったと捉えていた。カフェ参加後は、認知症ではあっても、認知症のない人と同様に敬意をもって、相手の状態に合わせて対応し、楽しんでもらえるようにその人の関心のありそうなことを探りながら対応していた。さらに、認知機能低下による発言に対しては、否定せず言動を受けとめ、認知症の人のできること、個人の特性を引き出し、活かせるように支援していた。一方、認知症の人への対応や危険が伴う場合の関わり方がわからない、個人や場による対応が異なること、行動心理症状への対応はカフェでの研修において学ぶことにより対応できることを捉えていた。

カフェで認知症の人と直接接すること、認知症の病状や対応方法の研修を通して、認知症の病状を理解し、自分と変わらない 1 人の生活者として認知症の人を認識していた。それらを通して、認知症の人を１人の人として尊重し、相手の状態や個別性を意識して対応を考えられていたと考える。ボランティア１人１人が認知症の人の実像を理解し、当事者意識を持つことは、認知症に対する偏見をなくし、適切な対応につながると考えられる。認知症サポーター養成講座などの座学とは異なり、認知症の人と直接接することは、認知症の人を正しく理解する機会になりうることが示唆される。

しかし、危険を伴う行動などがある場合は、対応方法がわからず、専門職の支援が必要であると考えていた。さらに、認知症の人への対応方法がわからないと捉えている認識もあった。武地（2015）は、認知症の人やその家族との接し方を学ぶことは容易でない面もあり、カフェ開催ごとのミーティングなどを通じて現場での継続教育が欠かせないことを指摘している。認知症の人への対応方法をボランティア同士で共有し、行動心理症状や危険を伴う行動への対応方法を学べる教育方法の検討が必要である。

認知症の人が地域で生活を継続するには、医療・介護の専門職とともに、地域で生活する１人１人が認知症の人は私たちとは何も変わらない人であり（日本老年看護学会声明,2016)、できないことだけを手助けすることでその人らしく生活できることなど正しい理解をし、適切に対応できることが求められている。ボランティアが認知症や対応方法を理解し、地域で暮らす人に生活するなかで伝えることができれば、認知症になってもその人らしく住み慣れた地域で暮らし続けることを可能にする地域づくりの一助となりうることが考えられる。今回の調査は、カフェ参加後のボランティアによる認知症と対応方法の認識に関する調査であり、参加前の認識が、参加後に変化していることは歪めない。しかし、ボランティアが、カフェ参加により、認知症を知り、自分自身も当事者となりうること、認知症の人々との接し方をについて体験を通してより深く理解できることは示唆された。今後は、短時間でのカフェで、より多くのボランティアが認知症や個別性、行動心理症状などの対応方法を理解できるようミーティングを活用した教育方法の検討が課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Mayumi Suganuma, Kazumi Asakawa, Shizue Nitta
２．発表標題 The experiences and understanding of dementia among community volunteers at a dementia cafe
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 菅沼真由美,　浅川和美, 新田静江
２．発表標題 認知症カフェに参加する市民ボランティアの体験と専門職支援
３．学会等名 日本老年看護学会第25回学術集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mayumi Suganuma
２．発表標題 The expeiences and understanding of dementia among community volunteers at a dementia cafe
３．学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関